能―二人静　立出之一声

上演詞章

1【名ノリ笛】

〈名ノリ〉

ワキ「これは和州みよし吉野、勝手の御前の社人にて候、さても毎年正月七日に、若菜を神供に供へ申し候、当年はそれがしが番に当たりて候ふほどに、女どもに申し付け、菜摘川に遣はさばやと存じ候

〈問答〉

ワキ「いかに女、菜摘川のほとりに出で、若菜を摘み、とうとう帰り候へ

ツレ「心得申し候

2【一声】

〈一セイ〉

ツレ〽見わたせば、松の葉白き吉野山、幾世積もりし、雪ならん

〈サシ〉

ツレ〽深山には松の雪だに消えなくに、都は野辺の若菜摘む、頃にも今やなりぬらん、思ひやるこそゆかしけれ

〈上ゲ歌〉

ツレ〽木の芽春雨降るとても、木の芽春雨降るとても、なほ消えがたきこの野辺の、雪の下なる若葉をば、いま幾日ありて摘ままし、春立つと、いふばかりにやみ吉野の、山もかすみて白雪の、消えし跡こそ道となれ、消えし跡こそ道となれ

現代語訳

1 勝手明神の神職の登場

神職　吉野勝手明神の神職です。当社では毎年の正月七日に若菜を神前に供えていますが、今年はわたくしが当番になったので、女たちに言いつけ、菜摘川に行くよう伝えたいと思います。

菜摘川のほとりに行って、若菜を摘んで、はやく帰ってくるように。

菜摘の女　承知しました。

2 菜摘女の叙景

菜摘の女　あたりを見渡すと、吉野山は松の葉も白くなっている。いったい、幾代にわたって積った雪なのだろう。

この深い山では松の枝に雪が消えずに残っているというのに、都では野辺の若菜を摘むころだろう、そう思っただけでも都のようすがしのばれます。

木の芽も顔をだすという春ですが、この野辺では雪はまだ消えそうもない。その雪の下にある若葉は、あと何日のあとに摘んだらよいのでしょう。春が来たとは名ばかりだけれど、み吉野は山も霞んで白雪が融けたあとに、いったんは見えなくなっていた雪の下の道が見えてくるのだ。

3

〈問答〉

シテ「なうなうあれなる人に申すべきことの候

ツレ「いかなる人にて候ふぞ

シテ「み吉野へおん帰り候はば言伝て申し候はん

ツレ「なにごとにて候ふぞ

シテ「み吉野にては社家の人、そのほかの人々にも言伝て申し候、あまりにわらはが罪業のほど悲しく候へば、一日経書いてわが跡弔ひてたび給へと、よくよく仰せ候へ

ツレ「あら恐ろしのことを仰せ候ふや、言伝てをば申すべし、さりながらおん名をば誰と申すべきぞ

シテ「まづまづこのよし仰せ候ひて、もしも疑ふ人あらば、その時わらはおことに憑きて、委しく名をば名のるべし、かまへてよくよく届け給へと

〈歌〉

地〽夕風まよふあだ雲の、憂き水茎の筆の跡、かき消すやうに失せにけり、かき消すやうに失せにけり

4

〈口〉

ツレ「かかる恐ろしきことこそ候はね、急ぎ帰りこのよしを申さばやと思ひ候

〈問答〉

ツレ「いかに申し候、ただ今帰りて候

ワキ「なにとて遅く帰りてあるぞ

ツレ「不思議なる事の候ひて遅く帰りて候

ワキ「さていかやうなることぞ

ツレ「菜摘川のほとりにて、いづくともなく女の来たり候ひて、あまりに罪業のほど悲しく候へば、一日経書いて跡弔ひて賜はれと、み吉野の人、とりわき社家の人々に申せとは候ひつれども、まことしからず候ふほどに、申さじとは思へども、**なにまことしからずとや**、うたてやなさしも頼みしかひもなく、まことしからずとや、ただほかにてこそみ吉野の、花をも雲と思ふべけれ、近く来ぬれば雲と見し〽桜は花にあらはるるものを、あら恨めしの疑ひやな

ワキ「言語道断、これなる女にたちまち物の憑いて、狂はせ候ふはいかに、やあ女、いかやうなる者の、憑き添ひたるぞ名を名のれ、跡をばねんごろに弔ひて参らせ候へし

ツレ「なにをかつつみ参らせ候ふべき、判官殿に仕へ申せし者なり

ワキ「判官殿の御内の人ならば、衣川のご最期まで、おん供と聞こえし十郎権の頭

〈クドキグリ〉

ツレ〽兼房は判官殿のおん死骸、心静かに取り収め、腹切り焔に飛んで入り、ことにあはれなりし忠の者、されどもそれにはなきものを

〈クリ〉

ツレ〽まことはわれは女なりしが、この山まではおん供申し、ここにて捨てられ参らせて、絶えぬ思ひの涙の袖

地〽つつましながらわが名をば、静かに申さん恥づかしや

5

〈問答〉

ワキ「ただ今の言葉の末にて聞き知りて候、さては静の立ち寄り給ひたるか、静にてましまさば、舞を舞ふて御見せ候へ、跡をばねんごろに弔ひ候べし

ツレ「わが着し舞の装束をば、勝手の御前に納めしなり

ワキ〽さてその舞の衣装は何色ぞ

ツレ〽袴は精好

ワキ〽水干は

ツレ〽世を秋の野の花尽くし

ワキ「これは不思議の事なりと、宝蔵を開き取り出だし、見ればげに舞の衣装あり、これを着てとくとく舞をおん舞ひ候へ

《物着》

ワキ「静御前の舞をおん舞ひあるぞ、みなみな寄りてご覧候へ

ツレ〽げに恥づかしや我ながら、昔忘れぬ心とて

ワキ〽さも懐かしう思ひ出の

ツレ〽時も来にけり

ワキ〽静の舞

ツレ〽いまみ吉野の川の名の

シテ〽菜摘みの女と、思ふなよ

地〽川淀近き山陰の、香も懐かしき袂かな

6

〈サシ〉

シテ、ツレ〽さても義経凶徒に准ぜられ、すでに討手向かふと聞こえしかば、小船に取り乗り、渡辺神崎より、おし渡らんとせしに、海路心に任せず難風吹いて、もとの地に着きしこと、天命かと思へば、とがなかりしも

地〽とがありけるかと、身を恨むるばかりなり

3 菜摘女と女（静の霊）の問答

女　これこれ、そこの人に言いたいことがあります。

菜摘の女　どなたでしょうか。

女　神社にお帰りになるのでしたら、言付けたいことがあります。

菜摘の女　なにごとでしょうか。

女　神社に帰ったら社家の人やそのほかの人々に言伝てしてください。わたしの罪業があまりにつらいので、一日経を書いてわたしを弔ってほしい。それをよくよくおっしゃってください。

菜摘女　なんと恐ろしいことを言われるのか。それでは言伝けをすることにします。それにしても、あなたは誰なのですか。

女　まず、このことをおっしゃってください。もしそれを疑う人がいるならば、その時はこのわたしがあなたに憑いて、はっきりと名を名乗ります。しっかり伝えるように。

女はそう言ったかと思うと、夕方の風に吹かれた雲のように、かき消すように消えてしまった。

4 菜摘の女と神職の問答

菜摘の女　このように恐ろしいことはありません。すぐに帰って、このことを伝えようと思います。申しあげます。ただいま帰りました。

神職　どうして遅くなったのか。

菜摘の女　不思議なことがあって、遅くなりました。

神職　何事ですか。

菜摘の女　菜摘川のほとりに、どこからとも なく女がやって来て、「あまりに罪業がつらいので、一日経を書いて、わがあとを弔ってください。それを神社の人、とりわけ神職に伝えよ」と言われたのですが、どうも本当らしくないので、伝えまいと思ったのですが……、**なに、本当らしくないだって。**残念なことに、せっかく頼んだかいもなく、本当らしくないですって。歌に、「吉野山の花を遠くから見ると、花を雲と思うのは当然ですが　〽近くに来れば、雲とみえたものは花であるのがはっきりする」と詠まれたように、このような疑いは残念としか言いようがありません。

神職　これは驚いた。この菜摘の女にたちまち物が憑いて、狂わせるとは。これ、女よ。だれが憑いたのか、その名を言え。亡きあとをねんごろに弔ってやろう。

菜摘の女　なにを隠そう。判官殿に仕えていた者です。

神職　判官殿のみ内の人なら、衣川でのございごまで、おん供をしていたという十郎権守か。

菜摘の女　いや、兼房は判官殿のおん死骸を落ち着いて取り納めてから、腹を斬って炎に飛び入った感心な忠義の者ですが、それではありません。本当はわたしは女ながらこの山までお供したものの、ここで捨てられた者です。それを思うと涙がとまりません。はずかしいけれど、わが名をしづかに申しましょう。わたしは静御前です。

5 静の霊と神職の問答

神職　いまの言葉で分かった。さては静御前が憑いたのか。静御前なら、舞を舞うてみせてください。亡きあとをねんごろに弔いましょう。

菜摘の女　わたしが着けていた舞装束をこの勝手の神前に納めたのです。

神職　それでは聞こう、舞装束はなに色か。

菜摘の女　袴は精好の朱です。

神職　では水干は。

菜摘の女　秋の野の花づくしです。

神職　これは不思議なこと。そう思って、宝蔵を開けて取りだしてみると、女の言うとおりの舞装束がある。それではこれを着して、さっそく舞を舞いなさい。

《静は舞装束を身につける》

神職　静御前が舞われるぞ。みなみな集まって、見物されよ。

菜摘の女　われながら、まったく恥ずかしいけれど、それでは昔のことを忘れていない、その気持ちを表わすことにしよう。

神職　さぞなつかしい思い出であろう。

菜摘の女　その時がやってきました。

神職　静の舞を舞ってください。

菜摘の女　いまお見せましょう。

静の霊　わたしを吉野川の菜摘の女と思ってはいけませんよ。淀も近い山陰の空気はあのなつかしい袖の香りがする。

6 静の述懐

静の霊、菜摘の女　さて、義経は謀反人とされ、すでに討手が向かうと聞いたので、小船に取り乗って、渡辺神崎より海を渡ろうとしましたが、海路は思うようにならず、強風吹き、もとの地に戻ってしまったのは、天命であろうか。それは罪がないことになるのですが、やはり罪があったのだと、わが身を恨む

〈クセ〉

地〽さるほどに、しだいしだいに道せばき、おん身となりてこの山に、分け入り給ふ頃は春、所はみ吉野の、花に宿借る下臥も、のどかならざる夜嵐に、寝もせぬ夢と花も散り、まことに一栄一落目のあたりなる憂き世とて、またこの山を落ちて行く

シテ、ツレ〽昔浄見原の天皇

地〽大友の皇子に襲はれて、かの山に踏み迷ひ、雪の木蔭を、頼み給ひける桜木の宮、神の宮滝、西河の滝、われこそ落ち行け、落ちても波は返るなり、さるにてもみ吉野の、頼む木蔭の花の雪、雨もたまらぬ奥山の、音騒がしき春の夜の、月はおぼろにて、なほ足引きの山深み、分け迷ひ行く有様は

シテ、ツレ〽唐土の、祚国は花に身を捨てて

地〽遊子残月に行きしも、今身の上に白雪の、花を踏んでは同じく惜しむ少年の、春の夜も静かならで、騒がしきみ吉野の、山風に散る花までも、追手の声やらんと、後をのみ吉野の奥深く急ぐ山路かな

7

〈歌〉

地〽それのみならず憂かりしは、頼朝に召し出だされ、静は舞の上手なり、はやとくとくとありしかば、心も解けぬ舞の袖、返す返

ばかりでした。そのうち、しだいに追い詰められて、この春の吉野山に分け入りなされたのであった。場所は吉野山ですから、花の下で横になっても、松風が吹き散らしはしないかとおだやかではいられない。そのうち花も散って、ほんとうに一栄一落を目の前にするような世の中だと思いながらも、この山を落ちていったのです。

その昔、浄見原の天皇が大友の皇子に襲われ、あの山に踏み入って、雪の木蔭を頼りにしたことがあります。桜木の宮、宮滝、西河の滝などでしたが、その水が落ちるようにわたしたちは落ちて行ったのです。滝の水は落ちても、やがてもとの水になりますが、わたしたちはそうではありません。それはともかくも、このみ吉野の木蔭の花を頼って、雨も止めることがない奥山は、風音も騒がしく思われる春の夜でした。その春の夜の月はぼんやりしていて、なお山は深いので、そこを分け行くさまは、あの唐土の祚国が花のために身を捨てて、遊子として残月のなかを行ったという、それもいまわが身に知られました。それはさながら、朗詠に「花を踏んでは、同じく惜しむ少年の春」と謡われているようなようすでした。そのように春の夜も騒がしいみ吉野は、山風に散る花まで、追手の声であろうかと、後ろばかり見て、山路をさらに奥深く行くのでした。

7　静の舞

静、菜摘の女　なによりつらかったのは、頼朝に召し出されて、「静は舞いの名手である。はやく舞うように」という仰せでした。舞いを舞うような気持ちにはならず、かえすがすもうらめしく、昔恋しき時の和歌

シテ、ツレ〽しづやしづ

《序ノ舞》

〈ワカ〉

シテ、ツレ〽しづやしづ、賤の苧環、繰り返し

地〽昔を今に、なすよしもがな

えすも、運命を恨めしく思いましたが、わたしはとにかくなつかしい昔の「時の和歌」を上げたのです。「しづやしづ、しづの苧環繰りかへし、昔を今になすよしもがな」と。

《静の霊と菜摘女は一体となって、頼朝の御前で白拍子舞を再現的に舞う》

静、菜摘の女　「倭文を織る糸車を繰り返すように、昔を今に戻すことができたなら」と、そう歌って舞ったのです。

8

〈ノリ地〉

シテ、ツレ〽思ひ返せば、いにしへも

地〽思ひ返せば、いにしへも、恋しくもなし、憂き事の、今も恨みの、衣川、身こそは沈め、名をば沈めぬ

〈中ノリ地〉

シテ、ツレ〽武士の

地〽ものごとに憂き世の習ひなればと、思ふばかりぞ山桜、雪に吹きなす花の松風、静が跡を弔ひ給へ、静が跡を弔ひ給へ

8　終曲

静、菜摘の女　思えば昔だって恋しくはありません。つらさは残っていて、憂きことばかりです。あの衣川に義経殿は身こそ沈んだのですが、武士としての名は残りました。なにごとであれ、つらいのが世の中というもの。山桜は松風のために吹き散らされています。どうか、静のあとを弔ってください。

詞章・現代語訳についてのメモ

1　【　】は登場楽、〈　〉はフシの名称、《　》は舞事などを示し、〈問答〉〈上ゲ歌〉〈クセ〉〈掛ケ合い〉などはフシの名称を示します。

2　「　」は拍子がないコトバで、劇を進行させるもの、〽は拍子に合うフシのことで、人物の感情などが述べられます。

3　「地」は合唱（地謡）の担当する謡ですが、「地」には、シテあるいはツレのセリフ、ワキのセリフ、そのどちらでもない叙景とか作者の言葉などがあります。シテやワキのセリフなどの場合はそれがだれのセリフかはすぐ分かりますが、三つめの「地」は途中からそうなることもあります。本曲の場合は、第3段の末が戸書き的なところで、一カ所です。そこの訳は二字下ゲです。

4　左肩の小字は掛詞です。下段の口語訳もなるべくそれをふまえるようにしています。このほかにも能には、縁語・序詞・和歌・漢詩・故事の引用があり、象徴劇としての能を構成していますが、それらは記していません。

5　『二人静』は「憑き物」の能です。本曲では菜摘女に静の霊が憑くのですが、その表現のしかたは二つあります。一つは、文字どおり菜摘女に霊が憑くもので、**4** **5** のツレのところです。ゴシックにした **4** の「なにまことしからずとや」からのツレの文句は霊が憑いた状態ですが、**5** のさいごの二行は静の霊の文句になります。もう一つは、菜摘女とは別に、憑いた静の霊が同装で登場して、二人で憑依を表現するもので、**6** **7** **8** のすべてです。ここにある「地」は二人の文句で、この演出は本曲にしかない趣向です。

6　下段は上段の原文にあわせた現代語訳です。

『二人静　立出之一声』を観るために

今回は「演出」をめぐって考えてみたいと思います。

―十八世紀の観世大夫だった元章の作と聞きましたが。

元章は観世流のほとんどの能の詞章や演出に改訂を加えたことで知られています。元章没後には詞章はほぼ元に戻ったのですが、演出は継承されました。本日の『二人静　立出之一声』もその一つで、五流のなかで観世流の小書がとびぬけて多いのはそのためです。

―通常の「二人静」はどのように演じられるのですか。

通常はツレである菜摘の女に静の霊が憑いて、彼女が宝蔵から静の舞装束を取りだして舞いはじめると、静の霊が同装で登場して、**6** **7** **8** を二人で同じように舞います。

―二人の舞いがピッタリ合うわけですか。

そうです。しかし、そんな名手をいつも二人も揃えることはできないと元章は考えたのです。宝生九郎もそう考えた役者で、明治の中頃に宝生流は能では演じない曲にしました。

―それで元章は「立出之一声」という新演出を考えた。その場合はどうなるのですか。

登場した静の霊は、**6** **7** を橋掛りに腰掛けて見ていて、いっしょには舞いません。つまり両ジテの扱いです。そのあとようやく **8** になって二人で舞います。しかし、これだと、『二人静』の最も肝心な部分がなくなってしまいます。そこで昭和五九年から、その中間の演出が工夫されてきました。その中心が梅若会や銕仙会で、本日の舞台もその流れです。

―よく分かりました。憑依の演出をどうするか、ですね。

菜摘女に静の霊が憑く場合、菜摘女の姿に憑けばよいわけです。事実、菜摘女が静の衣装を着るまではそういう形です。それが、**5** のさいごから同装の霊が登場する点に、この能の新しさがあると思います。